



男は 痛い



國友万裕

第42回

『総理の夫』

1. 里帰り

年末、突然、里帰りすることになった。3年ぶりくらいである。この2年くらいはコロナが続いていたので、母の方も今は帰らないほうがいいとずっと言っていた。やっと少し収まってきて、本来ならば父の命日の2月に帰る予定だったのが、急遽、里帰りを決行することになったのだ。

俺が帰省するときは、大概はこうだ。その時の勢いで突然里帰りする。母や弟も突然帰ってくるのでびっくりする。

俺はあまり故郷に帰りたくない。この連載で何度も書いている通り、俺は故郷が好きじゃない。それに強迫的心配性なので、留守中に家が泥棒に入られるんじゃないかと心配になる。前もって里帰りの計画を立てていると心配があれこれ募っていく。むしろ、思いついた日にパッと帰るのが一番いいのだ。

とは言っても、俺は長いこと故郷にいることはできない。京都のことが気になって3日くらいでとんぼ帰りしてしまう。せっかく自分の京都での生活を確認してきたのだ。実家にいる間に泥棒にでも入られて、あるいは家が火事になって、全て無くしたりしたら、俺はこれから何を支えに生きていけばいいのだろうか。

今回帰ることになったのは、暮れも押し迫った26日である。その日たまたま大阪でちょっとだけ発表を頼まれていた。若い先生たちが中心の会で、今まだ30代の彼らから見れば、俺はベテランである。何か話をしてくれないかというのだ。場所は大阪。大阪まで行くんだったら、その後、そのまま新大阪から帰れる。

しかし、もう12月に入ってだいぶ経つ、チケットが手に入るのか。俺が大学の頃、1月2日に里帰りから京都に戻ろうとすると、指定席はいっぱいで自由席しかなく、座るところか立てないという状況だった。もう2度とあんな思いはしたくない。それで俺は正月には帰らないと割り切っ

っと生きてきた。

ところが、直前になった頃、ふと思いついてネットで見ると 26 日の夜はまだ席がある。正月は、3 日は流石に埋まっているが 2 日までだったらチケットが空いている。昔に比べれば、新幹線の本数も増えて、帰省時期もばらついてきて、席に余裕が出てきたのだろう。

じゃあ、久しぶりに帰ろうか。母はもう 80 代である。いつ何が起きるかわからない。その日発表が終わり、若い先生たちと焼肉を食べて最終の新幹線で帰ることになった。大阪というに近いようで遠い。土地勘がないので、思わぬトラブルも起きる。その日は早めに食事会の席を立てタクシーに乗り、早めに駅に着いたのはよかったものの、雪で新幹線が大幅に遅れてしまい、30 分くらい待つ羽目になった。

最終の新幹線である。30 分であっても雪で遅れてしまうとその後の時間もどんどん押していった。故郷の駅に着いたのは深夜の 12 時を回っていた。駅は昔に比べると相当変わっていて、綺麗になっていた。

しかし、着いた途端にちょっとしたトラブル。タクシーが来ないのだった。もう深夜を回っているので駅前であってもタクシーは泊まっていない。一緒に並んでいた、女性二人が親切にも電話で俺の分のタクシーも呼んでくれた。

実家は駅からタクシーで 10 分もかからないところなのだが、危うく道を間違うところだった。街の風景がだいぶ変わってしまっているのでタクシーの運転手さんに指示しても、うまく通じないのだ。

踏んだり蹴ったりで、どうにか家に着いたのは 12 時をはるかに回った時間だった。母はまだ起きていてくれてインスタントラーメンを作ってくれた。

そしてそれから 1 週間ほど実家に滞在することになった。1 週間も滞在するのは本当に何十年ぶりだろうか。

母は今 83 歳。今年の 3 月で 84 歳になる。しか

し、歳の割には元気だ。帰省中は毎日俺のために食事を作ってくれた。商家だったため、母は仕事が忙しく、俺が子供の頃には美味しいものを食べさせてあげられなかったことが後悔だと言っていて、今回はその埋め合わせに張り切っていたみたいだった。

母は高齢だが、死ぬことは怖くないと言っている。母の人生は 60 くらいまでは大変だったが、その後、徐々に幸せが巡ってくるようになって、今では幸せを感じているみたいだ。終わりよければ、すべてよし。母は自分の人生を後悔していない。

弟は親孝行ないいい子だが、どうにも婚活がうまく行かなくて、もうすぐ 50 なのに独身である。今更相手が見つかったにしても子供を持つにはもう遅いだろう。母は結局孫の顔を見ることはないのだが、そのことも気にしていない。

親戚のおじさんたちはすべて亡くなった。おばさんたちはまだ体は大丈夫だが、もう頭はボケてきている。時は確実に流れていくのだった。

1 週間帰っても何もすることがあるわけではない。故郷に帰省しても変わらず映画館通いが続いた。街は昔に比べると都会化している。洒落た都会風の建築物が増えて、垢抜けしてきている。

都会との違いは、私服の高校がないということだ。実は俺が地方を拒むのは、そこに理由の一つがあったのだ。これは前にも書いたかも知れないが、俺は大学の頃から付属校から入ってきた連中が好きだった。俺が同一化の対象にできるのは彼らだけだったのだ。私立大学の付属校だと制服もない、規則も厳しくない、受験もない、おおらかで、高校くらいからディスコに行ったりしていたような子が当時から多かった。

俺は故郷にいた頃、散々、体罰や校則に苦しめられ、不登校になった。不登校を理解してくれる人は少ない時代だった。地方の公立高校に通っていたような連中は、俺がどうしても受け入れられなかったことを受け入れてきた奴らだ。その一方で、付属校組はのびのびと 10 代を生きてきている。だから俺は彼らだったら同一化できる。俺だ

って、付属校だったら、まともに高校に行けていたかも知れないと思うからである。

考えてみれば、俺の人生は自分が同一化できる人を探しての旅だったのだった。これも前に書いたか（笑）。

2. アイデンティティを探して

人生というのは長いようで短い。京都に初めてきた日のことが昨日のことに蘇る。地方の学生が都会に来てまず失敗するのは地下鉄や私鉄の乗り方である。俺も京都から梅田に初めて遊びに行った時、チケットの買い方がわからず、当時は駅員さんも無愛想だったため、まともには教えてくれず、どうにか買い方はわかったものの、普通列車に乗ってしまった。

地方都市には路面電車しかない。だから地方から来た学生は、特急に乗ると追加料金が発生すると思ってしまう。これは、今でも変わっていないようで、地方から来た学生たちに京都に来てからの失敗談を訊くと、その話が必ず出てくる。

とは言っても、東京の人から見れば京都も地方だ。俺は、東京に行くたびに東京はメトロポリスだなあとと思う。かつては東京に憧れた俺だったが、結局、東京で暮らすことはなく、京都でもう40年暮らそうとしているのだった。そして今となっては京都での生活をどうしても手放したくない。その気持ちが強過ぎて、強迫症になってしまっているのだった。

俺は故郷とうまく行かず、入った学校とうまく行かず、自分のアイデンティティと胸を張って言えるような場所が一つもないのだ。それはもちろん、自分の居るところに満足できない、俺の性格のせいでもあるのだけど、性格は宿命である。そうそう変わるものじゃない。自分の居場所をどこかに探したい。それを求め続けてきた俺は、ついに京都での生活が40年近くになり、京都に居場所を築こうとしているのだった。今の俺には京都がなくなったら、自分のバックボーンもアイデンテ

ィティも無くなってしまっていた。

俺の今の生活は、仕事、外食、映画、マッサージ、ボクシング、そして電車とバスの通勤で過ぎている。以前は水泳も俺の人生の一部だった。

しかし、今は水泳はほとんど行っていない。仕事が忙しくて、なかなか近所のスポーツクラブに行くことができない。それで一応退会して余裕ができてから行くのだとついに割り切った。お金さえ払えば、単発でクラブを利用することもできる。これからお金も節約して、老後に備えなくてはならないので、行きもしないのに無駄な月謝を払うよりも、その方がいいだろう。

この原稿が出る頃には俺は58歳だ。確実に歳はとっている。自分の写真を見ても、おじさんからおじいさんの領域に変わりつる顔だなあと感じる。それに、何よりも気力や体力が峠を超えてしまっている。

先日、毎年恒例の『キネマ旬報』のベストテンが発表になって、去年の外国映画の2位にワイズマン監督の『ボストン市庁舎』がランクされている。ちょうど今出町座で上映中だ。30代の頃だったら大阪や神戸であっても軽い気持ちで見に行っていたのだけど、今は京都でも4時間を超える映画は見に行く気にならない。それどころか近所の蔦屋まで自転車を走らせることすら億劫になっている。今や、映画も配信の時代。それに慣らされているため、ほとんど外に出る気にもなくなっているのだ。

ボクシングはチケット会員なので、どうにか3週間に1回ほど通っている。ここが楽しいのは、男ばかりの世界を堪能できることだ。女性の会員もいるのだが、俺の行く時間帯は男ばかりなので、他のマッチョな男性たちの一員になれる。伊藤公雄さんによると、俺が憧憬しているものは「ホモエロティシズム」なのだ。俺は彼らと肉体的な関係を持ちたいとは思わない。だけど、体育会的な男同士のつながりを持ちたいと思うのだった。俺は子供の頃からこういう体育会的環境に憧れながらも、運動神経が鈍かったため、参加することが

できず、結果として引きこもってしまったのだった。

その傷跡はいまだに癒えてはいない。大人になってからは、プールも20年くらいは本格的にやっていたわけだし、ボクシングも少しずつ上達している。俺が運動神経がなかったことを知っているやつなんていない。

もう運動音痴だった自分は卒業して良いのだ。誰も俺の少年時代なんて知らんのだから、しかし、俺が少年時代に受けた傷はあまりにも大きく、50年近くが経った今でも解決することはできないのだった。

あの当時の体育教師は、結局、校長になって教師生活を全うしたようだ。その間、紆余曲折あって、多少はあいつも変わったのかも知れないが、ネットに出ていた写真を見ると大して変わっているようにも見えない。元々お山の大将になるのが好きな人だったから、自分から校長を志願したのだろう。

俺は何も悪いことはしていない。少なくとも自分の意思を他人に強要して、相手を傷つけるようなことはしていない。だけど、神様は俺には試練を与えた。どん底の試練を与えた。人生の早い時期に心が壊れた俺は、家庭的な幸せも欲しない人間になってしまい、社会的にも認知されないまま、還暦を迎えようとしているのだった。

一方で、あいつは俺の人格を粉々に傷つけ、おそらくそのことに気づきもせず、一生を全うしようとしている。このやりきれなさをどう消化したら良いのだろうか。

3. 周縁的男性

周司あきらの『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』(大月書店)という本を読んだ。

この本にはコンネルの説が引用されていて、男性性を4つにカテゴライズしている。最も高い規範と見做される覇権的男性性(Hegemony)、それに追随しようとして利益を得る共犯的男性性

(Complicity)、男らしさが欠如している従属的男性性(Subordination)、異なった、特有の男らしさを保持する周縁的男性性(Marginalization)の4種類である。この著者の話だとゲイは従属的で、トランスは周縁的にカテゴライズされるとのことだ。

俺は従属的というよりも周縁的だった。どこにも属さない。群れから外れた子羊のような子だった。今でも俺は周りの人から「ユニークだ」と言われる。相手は悪気もなく、むしろ、面白いという意味でポジティブに言ってくれているのだが、そう言われると俺は今でもなんとなく、胸が痛いような気持ちになる。

今は、それなりに友達もいるが、俺が40ぐらいまで長い孤独な人生を歩まざるを得なかったのは、どこにも属さない男だったからなのだった。大学に入ってから、どこかに居場所を探そう、どこかに属そうと必死だったのだが、それが裏目に出まくった日々だった。本当に亀の歩み。一步、一步しか前に進むことはなかった。

そして、その俺も58歳。結局、仕事は非常勤のまま。このままどこにも属さないまま孤独に人生を終えることになるのだろう。その方が俺に合っているとは言えるけれど、やはりこういう宿命を背負って生まれた自分が悲しくもあるのだった。

これまでの30年間。勉強は山のようにしてきた。将来への不安をかき消すために勉強をしていた。しかし、今となってはどんな本を読んでも昔ほどには引き込まれない。ジェンダーの勉強も山のようにしてきて、今となってはジェンダー関連の新刊を見ても、食指が沸かないのだった。

これからはボランティア活動でも始めて、自分よりも他人に目を向けるのも良いかも知れない。誰かの居場所になることが悩みの解決策なのかも知れないのだ。

4. 男も映画が安くなる!!!

痛恨の思いを抱えたまま人は一生を終えるのだ

ろうか。おそらく、一生、俺を傷つけてきた人にリベンジするチャンスは巡ってこない。これからの人生を取り戻すチャンスも巡ってこない。あるものと言えば、悔しい気持ちとまだ癒えないトラウマである。

ただ、世の中は着々と俺が望んでいた方向に進んでいる。

最近の一大事として言えるのは、映画のレディースデーがなくなったことだ。今は京都の映画館は水曜日はレディースデーではなく、割引デーに代わり、男性であっても割引料金で見ることが出来る。

レディースデーは数ある男性差別の一つだった。

20年くらい前から「男性差別は？」と訊くと、「映画のレディースデー」と答える男子学生が多かった。「男だって安い方がいいのに！」と言っていた。昔だったら男性の方が収入は多かったから、たまに女性が優遇されるのは仕方がないと思っ

ている人が多かったはずだが、今の若い男性たちは男女平等が当然の中で生きてきているので、なぜ、そこで女性が優遇されるのかがわからないみたいだった。

普段は「男女平等！」「性差別反対！」とうるさく言っている女性たちも、この部分になると声が小さくなっていた。

例えば、15年ほど前ある女性の先生にレディースデーのことを話すと「せせこましいー。そんなこと言っているような男の人に限って映画なんて見なくせに」と笑われたものだった。

また、男女共同参画センターに置かれていたチラシにも、「レディースデーは映画館がお客さんに来てもらうための苦肉の策なのだし、それに今はレディースデー以外にも、映画の日やレイトショーなど男性でも割引料金で見ることのできる時はあるから、そういう時に男性も見に行けばいいのですよ」と書かれていた。

女性差別となったら絶対に許そうとしない人たちが、男性差別に対しては「それくらいのこと」と一蹴してしまう。その態度が問題なのだと思

っていた。実際、アメリカではレディースデーなんてないはずだし、作ったら問題になるという話を聞いたことがあった。

でも、やっとこれで男性差別ひとつ解消である!!! これはこれで価値あることなのだ。男でも差別を摘発できるような世の中にしなければ、男性問題はいつまでも認知されていかない。映画のサービスデー自体は小さな差別であったにしても、小さいことを少しずつ積み重ねていくうちに、男性も差別されているという認識が世の中にできあがっていくはずなのだ。男性が差別を訴えることができるようになったことが進歩なのである。

とは言っても、俺はもう58歳だ。サービスデーの恩恵を受けられるのはあと2年だけ。60歳になったらみんなシニア料金なのでいつでも割引になるのだ。

やはり俺は生まれてくるのが早過ぎたのだった。

5. 失ったものを求めて

58にもなると新しい世界に出会うことも少なくなっていく。しかし、最近になって縁ができて、キリスト教の聖歌隊に参加させてもらうことになった。とは言っても、まだ入ったばかりの新米なので、いつまで続くかはわからないが、とりあえず、新しい世界の入り口に立った。まだしばらくは希望を持って生きていけ！という神様のお告げなのだろうか。

俺の声はバスである。俺の声は他の男性たちよりも1オクターブくらい低い。俺は女みたいな男なのに、声が低い。自分に合わないなあ。体の横幅がでかいのも自分のキャラとあっていない。俺はやはり「まだらマッチョ」なのだ。

まだまだ歌の方はメロディをまともに覚えてもいないが、上等の楽譜ファイルを買った。これでしばらくは続けるという決心をつけるためだ。

日曜日の礼拝が終わった後、毎週30分くらい練習。聖歌隊のメンバーは俺より年上の人が大半で、しかも元学校の先生だった人が多い。そのせいか、

人の世話をするのは得意な人たちのようで、まだ入ったばかりの俺にも気を遣ってくれる。メロディが覚えられないので、わざわざ、テープに録音してくれた人もいて、感激だった。

皆で30分ほど指導の先生のピアノに合わせて、歌を歌っていると若い頃の切ない思いが湧き上がってくる。俺は高校の時にそれができなかった。皆が高校に通っていた3年間。俺は一人で過ごしたのだ。俺が一人で過ごしていた頃、他の人たちは、クラブで青春を謳歌していたのだろう。

あの当時の俺は本当に苦しかった。袋小路だった。しかし、誰もわかってくれなかった。見当はずれなことばかり言われた。白眼視された。まだ不登校という言葉もなかった頃である。

あー、また過去の悲しみへと引き戻される。

若い頃の空白を埋めるために、俺はアクティブおじいさん、スポーツマンおじいさんになりたい！と思うのだが、その一方で、この頃は趣味や人間関係を整理しなくてはという気持ちにもなっている。そうしないことには体力がもたないし、歳をとってくると、自分にとってプラスになることとまらないことがなんとなくわかってくる。

昔、『母の眠り』という映画で、「小さな世界の中にこそ、大きなものがある」というセリフが出てきた。まさにそうなのである。

若い頃はさまざまなものを試したが、歳をとってからは全てを試すゆとりがなくなってくる。今までしてきたものを深めつつ、新たに縁があるものが見つかればやっていく。そういうスタンスに変えていかなくてはならない。

一時期はさまざまな飲食店を食べ歩きするのが楽しかったが、この10年くらいは徐々にお気に入りの店に絞られてきて、そこの常連さんになってしまっている。量よりも質。これからは見る映画も、通う飲食店も、スポーツも何から何まで手をつけるのではなく、本当に自分に合ったものを探し続けなくてはならない。

6. 『総理の夫』(河合勇人監督・2021)

ネットのサイトを検索していたら、田中圭は最も筋肉が美しい男優に選ばれているみたいだ。この人はいつだって可愛い雰囲気での男の役で、性格的には男っぽいというイメージはない。この体とキャラのアンバランスがいいのかもしれない。顔はかわいいのに体はムキムキ。そういうタイプの人を韓国ではだいぶ前からモムちゃんと呼んでいた。日本はこの頃韓国ブームで、俳優さんたちも韓国人的顔の人が流行り(例えば、坂口健太郎など)みたいだ。アジアの大衆文化の中心は今となっては日本よりも韓国なのである。

田中圭の主演の『総理の夫』を見た。タイトルとポスターだけ見ても、大体内容は推察がつくが、これは明らかにジェンダーの反転を意識した映画だ。日本初の女性総理(中谷美紀)の話である。その夫を演じるのが田中圭となっている。

ここで田中圭は、自分よりも社会的に上位にある女性と結婚生活を送り、しかも、家庭的で、妻の体の様子なども気に掛ける男を演じている。女性の仕事をサポートする男という部分に焦点を当てるシンデレラストーリーの反転なのである。田中圭は、これまで『おっさんずラブ』でも、同性愛関係になる男をなんの不自然さもなく演じていた。しかもあの映画では、キャビンアテンダントという常套的な女性の職業をしている男性役だった。そういう男性がハマる人なのである。

これはもちろんジェンダーがなくなっていく社会を風刺しようとしているのだろうが、その部分を強調しないところが、これらの映画の良さだと俺は思っていた。同性と恋愛関係になるということ、男のキャビンアテンダントだということ、妻の方が社会的地位が上であるということ、これらのことをテーマとしてシリアスに描くのではなく、コメディタッチで軽く描いている。もちろん、現実はこちらは行かないということはわかっているが、気楽に笑って観ることができるところがいい。

映画の後半、子供の問題がリークする。女性は総理であっても、子供を産む性であるという問題

がクローズアップされる。また別の場面で、「女性女性と騒がれるのは不愉快だ」という総理のセリフが出てくる。定石通り。要するに男女の反転に女性特有の問題が一部絡むとう話でしかないのだ。だけど、こういう映画が増えるうちに次第に国民の意識も変わっていき、現実の「総理の夫」となる人が出ることになるだろう。それを期待したいところだ。

田中圭は、『そして、バトンは渡された』（前田哲監督・2021）でもこれに相通じる役を演じている。ここではヒロイン（永野芽郁）のお父さん役だが、義理の父親という設定であり、血のつながらない娘と二人暮らし。家事はお父さんである彼が担っている。

10年ほど前までお世話になっていた先生が言っていたのだが、男性が離婚して、女子を引き取る場合、実の父親であっても性的虐待の可能性が懸念されるため、女性よりも親権の獲得が不利になることがあるのだそうだ。つまり、男は血のつながった子であっても性的虐待をするので、子供は女性といた方がいいという考えである。父になった経験のない俺には、実の子というのがどういう感覚なのかがわからないが、確かに映画などでは実子に性的虐待する男性は出てくる。

ところが、この映画の田中圭の場合は、実子ではなく、義理の父である。そうすると実子よりもさらに性的虐待の可能性は高くなるはずで、それがこんなに微笑ましく、血のつながらない父と娘で二人暮らしているというのが新しい時代を感じさせたものだ。

事実、一つ屋根の下で血のつながらない子供と暮らしていても、性的虐待をする男ばかりではない。『マイダディ』（金井純一監督・2021）という映画でも実の娘と思って育てていた娘が、検査の結果実子じゃないと判明するのだが、そのことで彼女が父にとって性的な存在になるわけでもないし、父性愛も変わらないという描き方をされている。

アメリカ映画で『ひとりじゃない、わたしたち』

（ニコール・ベックウィズ監督・2021）というのを観たが、これは40代のシングル男性が代理母に子供を産んでもらおうとする話だった。ちなみにこの男性はゲイではなく、ただ子供だけ欲しいという人だ。

昔だったら、女性が結婚しないで子供だけ欲しいという話があったが、男性でこういう人が描かれたらどうか。しかも、子供の性別はまだ生まれてみないことにはわからないので、娘である可能性もあるのだ。これはアメリカではどう受け止められているのだろうか。そういう問題を考えた。

性の問題はものすごく大きい。そのせいで男が悪者にされる。女性よりも男性の方が性衝動が強いし、相手が子供であろうが、実子であろうが、虐待する奴はするとみんな思っているからだ。しかし、女性だって肉体的・精神的虐待を子供にする人はいるし、女性から男子への性的虐待が存在しないわけではない。これからは個人に寄り添って解決すべき時代なんだけど、そこまで個別化するのは現実的に難しいのだろう。

まだまだ、ジェンダーの問題は割り切れない事柄が山積である。こんな問題に囚われてしまった自分を恨むなあ。しかし、今となっては俺の人生はジェンダーなしでは語れなくなっている。俺の人生のテーマとして、死ぬまで考え続けるのが俺の宿命みたいである。